
FLY ME TO THE MOON

千住夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FLY ME TO THE MOON

【Nコード】

N9621K

【作者名】

千住夏樹

【あらすじ】

ピーターパンとその仲間たちがやってきてネバー・ランドに連れて行ってくれると思っていたからだ。

いつまで経っても彼らはやっては来なかったけれど、朝、ベッドで眼を覚まして眠たい目を擦りながら自分に向かってこう言い聞かせた。

幼い頃、満月の夜は、決まって二階の窓から夜空を見上げていた。何時間も、何時間も、それこそ時の経つのも忘れて……。

ピーターパンとその仲間たちがやってきてネバー・ランドに連れて行ってくれると思っていたからだ。

いつまで経っても彼らはやっては来なかったけれど、朝、ベッドで眼を覚まして眠たい目を擦りながら自分に向かってこう言い聞かせた。

きつと彼らは僕を誘いにきたのだ。けれど、僕は眠っていたから、せつかくのネバー・ランドも何もかも憶えていない。残念だけれど、眠ってしまったのだもの仕方ない。

でも、僕の身体には確かに何処か別の場所に行ったのだという、感触があった。

それは、夢の続きの残り香のようなものだったけれど、僕には充分だった。

空想を夢想するような幼い頃の僕にとってそれだけで充分だったのだ。

確かに別の世界があるんだという確信が僕にはあったのだ。

あの頃から僕は大人に成りたくなかったのかも知れない。

妖しく光るその天空に浮かぶ満月は、それほど、僕にとって特別なものだったのだ、あの頃は……。

例えば、あの燕尾服を着たウサギが懐中時計を覗き込みながら、忙しく消えていったあの洞穴が何処かにあると思っていたし、クローゼットを開けると、その奥に冬景色に通じるドアが隠されていると思っていた。

それは、僕だけの秘密であって決して誰にも一言も喋らなかった。

何処でも良かったのだ。ここ以外の何処かでありさえすれば、何処でも良かった。

それこそ亀の甲羅の端の端、世界の果てでも良かった。その世界の縁から落っこちて別の世界に行きさえすれば良かった。

それはきつと簡単なことのように僕には思えた。あっちの世界に行くことは、それほど難しいことではなかった。自分の部屋に入り、ドアを閉めさえすれば良いのだ。そして、ベッドに横になり、天空を見上げる。

そこに満月さえあれば良いのだ。すぐさま僕はあっちの世界のドアを開けられたのだ。

そこでは、僕は活き々と呼吸し、本当の僕に成れた。こっちの世界では到底思いもつかないような大冒険に果敢に挑み、何かを成し遂げ、何者かに成れた。

分別が付く歳になっても僕の空想癖は僕の頭の中で確固たる位置を占領していた。

ただ周りとの調和を崩す怖さ、それだけが現実と僕とを繋ぐ、弱々しい接点だった。

だから、家族の前や学校では普通を演じ続けた。普通じゃないことを悟られるのが怖かったから、それだけだ。

恵美とデパートの屋上にある庭園みたいなところでマックを食べていた。十五歳、僕らは充分に若く、その若さを浪費していることにさえ気付かないほど若く……いつものデート、真っ黒な恵美の服装、白いシャツにチャコール・グレーの制服姿の僕。

空は群青色から今にも雨が降り出しそうな濃い灰色へと変わってゆく……。

「あのね、ロリータとゴスロリは違うのよ、決定的にね、潤はそこんとこ分かってない」

僕は恵美の問いに無言で返し、二個目のチーズバーガーを噛まずに

飲み込む。

「この服装はね、何ものにも染まらないって意味での黒なのよ、究極の黒、分かる？」

「つまりゴスロリなんだよね、恵美はね」

「そう、その辺のと一緒にしないでね、コスプレでもロリータでもないの……にしても潤って私服ないわけ？ デートの時っていつも制服よね、そればっか」

「恵美だって、黒ばっかじゃん」

「バカ！ これはオシヤレよ。潤と会う時はものすごく気を使ってるの、分かんないの！」

恵美の後ろにいた影踏みがチエシヤ猫みたいな歪んだ笑顔を見せた。

影踏みの背後の深淵はまた一回り大きくなったようだ。

「また何処見てんの！ ちゃんと見えてる？、ちゃんと見てよ私を！」

一粒、二粒、額に雫があたった。

「そのこのフェンスから飛んでみるよ、あの灰色に染まった空に、雲を突き抜けて、飛んでみるよ」

挑発するような言動、僕は声に出さずに嗜める。またあのチエシヤ猫の皮肉な笑み……あっちの世界の嫌われ者。

影踏みは相変わらず恵美の影を狙っている。何とかして恵美の影を盗もうと恵美の回りを徘徊する。

「雨だよ。そろそろ行こうか」

「いいのよ、雨なんか……ちゃんと見てって言ってるの、ちゃんと眼を見て話してたら！」

「恵美はお前のこと、大好きなんだなあ。美味しそうな影だなあ、食っちまいたいなあ」

僕は消えろと念じる。影踏みが萎れた顔で一瞬僕を睨み、虚空に消えた。

「なんだよ、なに切れてんだよ」

雨粒が足下を濡らす。大粒の雨が容赦なく頭上から降り注ぐ。パニックになった人々の怒号、それも消えると僕と恵美だけが屋上に取り残された。

「ほら、風邪引くから雨宿りしよ……」

振向いた恵美の顔に光る涙、額にあたる大粒の雨、あの夏の情景、何もかもが新鮮で、何もかもが生氣に満ちて、僕は恵美とさえいればあっちの世界に引き込まれることはない。

「そう思うんならちゃんと男らしく抱きしめてよ！ あたしたち手も繋いだことない！」

もう充分びしょ濡れの僕らがいた。真正面から見つめる恵美の瞳が眩しかった。

恵美は立ち上がり、顔を打ち付ける雨に向けた。僕は初めてそこにいる恵美を見つめた。

僕も立ち上がり、ぎこちない素振りで恵美を抱いた。

「ちゃんと抱きしめて、じゃないとほんとに風邪引いちゃうから」耳元で囁いた恵美の言葉に僕は抱きしめた腕に力を込めた。

暫くの間僕らはそこにそうしたまま微動だにせず、濡れるのもかまわず佇んでいた。

街の喧騒も何もかもが雨音に掻き消される。

重く湿った灰色の空、カーテンのように降り注ぐ雨、無機質なコンクリートの所々に点在する水溜り、そして、忘れ去られた幾つものベンチ……。

誰も居ない真昼間のデパートの屋上。恵美と僕だけの特別な時間が流れていった。真夏の匂いに咽かえるようなあの一瞬のあの特別な季節、そして二度とは戻らない若さを持て余していた頃。

雨はいつそうその勢いを増す。

探るように恵美の唇が近づく。ゆっくりと僕に向かって近づく。多分、そうするのが自然なのだ。僕は、それでも躊躇していた。何しろ何もかもが初めてなのだ。

恵美の柔らかな唇の感触……雨粒が容赦なく僕らを濡らす。

恵美の体温、高鳴る鼓動を直に受け止める僕の皮膚、二度目のキスは僕がせがんだ。

恥ずかしそうに答える恵美。ぎこちないキス……雨の味がするキス……。

恵美が僕の現実の全て……他には、何もない、一瞬、世界は恵美で満たされる。

突き抜けるような真夏の青空を見ているとなんだか飛べるんじゃないかと思ったりした。

満天の星空を見上げると更にその想いは強くなった。

所々出っ張った雲を突き抜けるとそこは、月と星の世界……あっち側との境界線だった。

飛ばうという欲求は寸でのところであつて回避される。

影踏みが僕の影を踏みつけていたからだ。

六歳の夏休み、田舎の祖父の家に一家で出かけた。夏休みの一週間そこで過ごすのが恒例だった。

祖父と近所の小川に魚釣りに出かけた。鯛がうるさいほど鳴いていた。ウグイやカジカが良く釣れた。

夢中になった僕は急な深水に足を取られた。溺れた僕は必死に祖父の名を呼ぶ。

その時だ。影踏みがあつちの世界から僕の腕を握った。

「僕はあつちに行けるのかい」

「ああ、このまま俺の腕を離さなけりやな」

気付いた祖父が僕を抱きかかえ、僕は息を吹き返す。祖父は、必死にあらぬ力を込めて僕を深水から救い出したから、影踏みまでこちの世界に連れてきてしまった。

救急車で運ばれ、少しだけ飲んだ水を吐き、何事もなかったようにその日のうちに僕は家に帰った。

ただ違っていたのは、影踏みが一緒だったってことだ。それ以来影踏みは僕の影に住み着いた。

「潤、あいつ影が薄いだろ。きつともうすぐお迎えがくるぜ」

時々影踏みは話しかけてくる。何処で、どんなことしていいようとお構いなしだ。

「ああ、当分こっちの世界にいついてやるさ、楽しいもんなあ、美味そうな影もいっぱいあるしなあ」

「僕は、お前の宿主ってことなの？　影踏みは僕にとって寄生、共生どっちなの？」

「♪ Fly Me To The Moon……さあて、どっちかなあ……今度一緒に飛んでみようぜ、気持ちいいぜえ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9621k/>

FLY ME TO THE MOON

2010年10月21日01時33分発行